

人口減少時代の地方郡部の高校教育の変化

—学校知の変化と魅力化（学校）コーディネーター制度に着目して—

樋田 有一郎

1 研究の背景と目的—人材育成機能から見た高校教育と過疎地の高校の負のスパイラル—

近年、少子高齢化の進む地方郡部の高校では入学者減と“高校の魅力の低下”の悪循環（「過疎地の高校の負のスパイラル」）が進み、高校は統廃合（再編）の危機を迎えている。そうした中で、地方の地域と高校は地域活性化と新しい進路・学力観（「地域型学校知」）・学習方法（「地域課題解決型学習」）の文脈で連携し地域の活性化と高校の魅力化を同時に達成しようとしている。本稿では、こうした連携の背景を明らかにしつつ、連携を支える魅力化（学校）コーディネーターの3つの機能、①都会—地方（地域、高校）の橋渡し機能、②高校—地域の橋渡し機能、③高校—行政（町村役場）の橋渡し機能を検討する。

地方郡部の学校を対象とした研究は、かつて教育社会学の中心的なテーマであったとされるが（久富 1992）、大衆教育社会（荻谷 1995）が進む中で都市部の学校の研究が中心となっていった。現在では地方郡部の高校の研究蓄積は極めて少ない状況である。

近年⁽¹⁾の地方地域に留まる人材育成に関する数少ない研究のうち、代表的な研究としては吉川があげられる（吉川 2001）。吉川は、トラッキング研究の立場から、大衆教育社会のメリトクラシー原理のもと地方から都市部へ、周縁から中心部へとナショナル・エリートを養成・吸収してきたナショナル・トラックに対置される、地元地域の医・薬・公務員・教員などの既存のローカル・エリート職につく人材を育成するローカル・トラックの存在を明らかにした。これまでの地方郡部の高校の人材育成機能の研究では、生徒を都市部の上級学校に送り出し、都市部で就職するナショナル・エリート育成および、地域で働くローカル・エリート育成の2つの進路形成機能が中心であった。それを支える高校教育の使命はセンター試験対策を中心とした試験学力向上であることが論じられた。

いま「ガラスの均衡（吉川 2001）」と称された地方の人口動態は、吉川の予測に反して1990年前後で人口減少率が再び上昇していった⁽²⁾。こうした中、地域経済の停滞と、過疎化地域の高校の統廃合問題が研究され（若林 1999）、国策として地方活性化が議論される（「第6次全総」）。さらに、中教審答申（文部科学省 2015）では、少子化・過疎化の社会変動の中での地方創成の文脈で教育の政策として学校と地域の連携が重視され、そのための仕組みであるコーディネーター制度に力点が置かれた。また、地方郡部の高校では低迷する地域経済を支える地域人材の育成が強く意識され始めた（樋田大二郎 2014）。

本稿では、地域人材を育成する高校の社会的背景とその取り組みを分析する。具体的には、高校を取り巻く地域の変化を見た後に、従来から続くナショナル・トラックやローカル・トラックへの人材輩出機能の下では、高校の人材育成の力点は、試験学力を中心とした従来型学校知に置かれていたのに対して、魅力化対象校では地域資源の利活用を中心とした地域型学校知（樋田・樋田 2014, 2015）による地域人材育成が進められていることを検討する。さらに、地域型学校知を推進する主要な方法として導入されている魅力化コーディネーター制度（学校コーディネーター制度の調査対象地域での呼称）の機能と意義を検討する。

2 調査の概要と分析の方法・目的

鳥根県⁽³⁾「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」（以降、魅力化事業）の対象校全8校で訪問聞き取り調査を行った。対象校はすべて地方郡部にある、地域に一つしかない普通科高校である。魅力化事業は、離島・中山間地域の県立高校と町村が連携し、高校魅力化と地域活性化が行われることを目指す。県が制度の枠組みを作り、高校と地域（町村）に大きな裁量を与えて自立的に事業を進めることが求められている。そして、県立高校と地元町村が事業推進をする合同の事業体を作ることが求められている（鳥根県教育委員会）。事業の1期目を終え（2011年度に始まり3年間）、2期目へと継続する対象校には、魅力化コーディネーターを置くことが義務づけられている。魅力化コーディネーターは魅力化事業の目玉事業として評価されていた（県教育委員会）。聞き取り対象者は、各校の学校長、魅力化事業の担当教員、魅力化コーディネーターである。くわえて事業を支援する地域住民にも適宜聞き取りを行った。さらに、事業を指導する県庁の担当部署で聞き取り調査を行った。

3 「過疎地の高校の負のスパイラル」—これまでの高校教育の直面する課題

地方郡部の高校では、①学力／進路保証と②部活動（特に運動系）③多様な人間関係、が高校の魅力（生徒・保護者の高校への期待）であると考えられてきたが（複数の訪問調査校校長）、少子化による生徒数減少は、これらの魅力を低下させた。魅力の①に関しては、標準法⁽⁴⁾によって生徒数と教員の配置は規定されており、生徒数の減少は教員の減少へと結果し、選択できない教科や取得が困難な資格を生じさせた。理科系の科目の教員、特に物理教員がいないことが見られ、理系進学が困難となることがよく見られた。②に関しては、生徒、教員の減少により部活動の種類が減った（特に球技系の部活動が難しくなる）。③に関しては、生徒数の少なさ人間関係の固定化や競争意識の欠如を生むという問題が指摘された。高校の魅力低下は、従来高校卒業後に生じていた地域からの若者の流出を他地域の高校への進学という形で中学卒業後から生じさせていた（町内生の高校進学率の低下）。高校入学者数の減少は、さらなる高校の魅力低下を生じさせた。この悪循環は「過疎地の高校の負のスパイラル」と呼ばれていた。こうした中、学校統廃合の議論が生じていた。

4 「高校と地域活性化の文脈」—魅力化という対応策。地域をめぐる新しい動き。

魅力化事業の対象校は、地域との連携によって高校教育に新しい魅力を生み出していた。これは本稿が取り上げる魅力化という新しい対応策であり地域の高校を存続させる動きである。高校は地域社会にとって①地域活性化の生命線と、②地域活性化の最前線の二つの意義を持つ（樋田有一郎 2014）。①地域活性化の生命線は、高校存続問題（統廃合問題）が町村に与える影響のたとえである。若林は、過疎化の文脈で論じて、高校が無くなると過疎化に拍車がかかるとした（若林 1999）。高校の統廃合は、子育て世代の流出と同時に U & I ターンの障害となる。ある町の地域振興課職員は「地元の子育て世代は高校統廃合問題には敏感だ。また、U & I ターン促進をしても、高校がなくなってしまうとアレって感じになってしまう」と述べた。②地域活性化の最前線（高校魅力化の最前線）は、高校の活動が地域活性化に影響を与えることである。高校魅力化の文脈で行われる地域課題解決型学習では、地域活性化を学ぶことを目的として授業内外で高校生が地域の活性化を考えたり実際に取り組んだりする。地域は高校と協働する過程を地域活性化のきっかけとして捉えていた。

5 地方郡部の高校の変化—魅力化の前後の高校教育の変化

吉川の調査対象校（島根県立横田高校）は、現在魅力化事業対象校となっているが、吉川の調査以降、後述するような変化が起きている。横田高校と同校を支援する地域住民を訪問調査した際に、上述の調査からおおよそ 20 年後の今日、地域住民は、異口同音に状況が変化したと述べた。最大の変化は生徒数減少や進学実績の変化であるが、他にも重要な変化が広まりつつあると指摘された。指摘は次の 3 点であった。

第 1 は、雇用状況に対する危機感の高まりである。ローカル・エリート職の雇用が減り、それ以外の職種の求人も大企業の撤退や地域経済の停滞の影響を受けて減少している（下記の教員の発言の他、地元商工会、町議会でも同様の指摘がされていた）。雇用に対する危機意識は地域の人材育成の取り組みを促進する大きな要因である。

第 2 は、近年の学力観の変化である。このことが横田高校の魅力化を後押しした。地方においては、「総合的な学習の時間」の導入や「生きる力」の学力観の浸透の結果、地域（活性化）がテーマや教材となり、グローバル人材の育成が学習の目的となった⁽⁵⁾。地域を考え地域に働きかけることで、具体的かつ普遍的な課題解決能力が育成されると考えられていた。（「ローカルの地にながら、ローカルの地だからこそ、グローバルを体感する（横田高校教員魅力化担当）」と表現された）。

第 3 は、上記二つを踏まえて、高校と地域は地域での起業や地域の活性化で活躍する人材の育成が意識されるようになった（樋田大二郎 2014）ことである。高校と地域は地域の新しい産業⁽⁶⁾や地域の文化・社会に貢献する人材の育成を意識し、地域活性化と学校活性化の連携を模索するようになった。

おおよそ 20 年前の横田高校は地元の進学熱を受け、子どもに試験学力を身につけさせて国公立の難易度の高い大学に進学させることが学校の役割であり、センター試験対策を中心とした受験指導が

教科指導の中心であったと教員たちは懐古的に語っている。これは上述の吉川の研究とも整合的である⁽⁷⁾。

学力観の変化と進路の考え方の変化は、吉川の中で描かれた典型的な郡部の高校でも従来までの学力観、進路の考えの間に葛藤が生じたことが聞かれた。以下は、横田高校での聞き取りである。

魅力化担当教員 葛藤がある。文科省の言うキャリア教育と、保護者が求めるキャリアすなわち自分たちが学んだキャリア教育、生まれてくる子どもに必要なキャリア教育で葛藤する。保護者の時代は偏差値の枠組みで生きてきた世代で、そういう進路指導がまかり通ってきた島根の様子があった。しかし、それは転換しなければいけない、それを隠岐島前高校⁽⁸⁾は島というスケールメリットでまかりとおらせた。そういう価値観の進路教育ならば地方は生き残れると、絶対生き残れると思う。

魅力化担当教員は吉川調査の時代の高校教育から、現在地方郡部で求められる高校教育の違いを感じている。吉川が示したようなこれまでのセンター試験型の学力を保証し大都市部の高偏差値の大学に生徒を送り込むという高校の役割が変化しつつあると指摘した。

さらに、吉川調査で描かれたセンター試験を中心とした受験に対する高校の指導の変化も指摘された。

インタビューアー AOとか推薦とか昔だったらある意味、王道ではないことも隠岐島前はやっている。それはここでも受け入れられるのか？

魅力化担当教員 全然受け入れられる。いまお話しした町おこししたりして大学に入った子はAOの子なので。できるのは英語と国語くらいで数学なんてメロメロだった。それはもう関係ないと思っている。全てがオールラウンドにできる必要はない。

インタビューアー センター試験の指導だけではなくて……

魅力化担当教員 そのほうが教員も指導がしやすく、硬直化したカリキュラムの中ではしやすいんです。全ての教科したほうが……。だけど、こういう田舎の学校ではそういうことはできないので、それよりも町おこしのことに関わらせながら……

インタビューアー ホッケー⁽⁹⁾での推薦は？

校長 山ほどいます。私立だが、山ほどいる。早稲田、法政、明治、山梨学院、立命館、朝日。ちょっと一つの部でそれはすごい。ついこないだまで体育科のある高校にいたがそこよりずっと推薦が来ていた。

魅力化担当教員 地域活動やってAOで入学するのも全然OK

吉川調査では横田高校ではセンター試験と国立公立受験が最重要視され、私立志望の生徒に対してもなかば強制的にセンター試験受験をさせていたことが指摘されていた。対して上記の語りからは、こうした状況が変化し地域型学習やスポーツ推薦、AO入試と言ったセンター試験以外の受験への寛容性が高まっている状況が指摘されていた。

インタビューアー (吉川(吉川 2001)の本を指さしながら) これを見ると国立公立重視とか……

魅力化担当教員 このときとはだいぶ色彩が違って、そういう子もいますが、前よりもオプションが増えている。AOもホッケーもいる。何が変わっているかという、公務員の就職が厳しくなっている。公務員がべらぼうに無くなっている。かえて町おこしとかそういうのが増えてきている。

インタビューアー この本をみるとセンター国公立以外認めない空気がある？

魅力化担当教員 あーそれはいまも残ってはいるが、教員の中にも議論ができてきていて、トップの特進クラスというところではあるが、あとは全然無い。

校長 この時期は島根県の高校、普通科の高校はみんなそうだった。

魅力化担当教員 みんなそうだった。

校長 進学を目指す者はとにかくセンター受けて、国公立目指すみたいな感じだった。

島根県立横田高校 2014年3月13日

上記で述べられているように、受験指導・進路指導に関しても吉川調査で描かれたセンター試験受験および国公立大を重視する状況が変化しつつある可能性が示された。

6 魅力化コーディネーター制度—橋渡しの機能から見るコーディネーターの役割

調査対象校の高校教育は、センター試験型に典型的に見られる課題が与えられ、選択肢が与えられ、選択肢の中から唯一解を選ぶ従来型の学習にとどまることなく、魅力化の取り組みの中で地域課題解決型の学習を開発している。そこでは生徒が自ら課題を発見し、複数の解決策を探しだし、それらの中から自分たちの町にとっての最適解を選ぶ。従来の教師が教科書と問題集を教えることが仕事だったのに対して、調査対象校の教師は生徒の地域課題解決型学習を支援することが仕事となる。この新しい仕事には大変な労力と地域資源を教育資源化する能力が必要となる。この新しい仕事を支援するのが、ここで検討する魅力化コーディネーターの役割である。

魅力化の取り組みを可能にしている仕組みであるコーディネーター制度について論じたい。事業では、魅力化コーディネーター制度の果たす役割が評価され、2014年度スタートの第2期では、コーディネーターの導入が義務づけられている。コーディネーターは高校と高校外部の情報と資源を橋渡し（Bridging）する役割を負う。橋渡しする人や資源をタイプ分けすると、①都会—地方（地域、高校）の橋渡し型、②高校—地域の橋渡し型、③高校—行政（町村役場）の橋渡し型、がある。また、コーディネーターになる人材の出身は、「Iターン者型」、「地元でずっと育った型」、「Uターン者型」の3つのタイプが見られた。

以下、まず、コーディネーターの一般的役割を整理した後、コーディネーターの役割を類型化して各々の特徴を示したい。

6-1 コーディネーターの役割と評価—魅力化の推進とコーディネーターの仕事

コーディネーターの共通する役割は、生徒数減少で統廃合の危機を迎える高校と過疎化が進む地域

の連携を進め、互いに資源の利活用を促進することである。

各校および県教委が次の点でコーディネーターを高く評価していた。学校が新しい取り組みをすることへの支援、多忙な学校教員の負担軽減、地域にとってよそ者である教員が苦手な学校外部での活動の支援、職員の流動性の高い離島・中山間地域での魅力化の事業の継続性の担保、学校外の人材の発想力や発信力などである。以下、コーディネーターの仕事を紹介しつつ、コーディネーターの機能と課題を検討する。下記は、県魅力化担当からの聞き取りである。

インタビューア：（町と高校の関係について）町と高校が連携協力するということですが、いま評価されていることと課題とされていることはなんでしょうか？

県教育庁魅力化関係者：いま一番評価されていることは、先ほど言いましたコーディネーターだ
と思います。これの役割は非常に大きかったと思います。いまもしコーディネーターではなくて、
今やっていることを全部学校の教員がやらなければならないとなると、まあすべてがぼしゃって
しまうと言うほどの働きをしていただいております。やっぱり地域におりますいろんな人材を高校
がうまく使い切れていない。地元の結びつきが、高校教員には転勤がありますし、一定の期間
で移動していきますし、なかなか地域とのパイプってというのがむずかしい。そういった中で、
コーディネーターの存在って言うのが、いろんな意味で大きかったですねえ。その地域人材との
橋渡し、地域行政との橋渡し、それから、学校の魅力の発信、そういった意味でも大きかったと
思います

県教育委員会 2014年7月8日

上記はコーディネーターへの総合的な評価であるが、対象校各校からも同様の発言が聞かれた。また、これまでの教科教育と大きく異なる地域型学校知（魅力化推進事業では「地域の特色を活かした教育」と呼ぶ）を高校で教えるためのカリキュラム上の問題と教員＝コーディネーターの関係の課題が聞かれた。以下は再び島根県立横田高校での聞き取りである。

魅力化担当教員：継続性をどうするかを頑張っている。教員はいつまでもいるわけではない。
……安定させて続けるために苦勞している。だからこそ教員と違って同じ場所にいるコーディネ
ーターの役割が重要だ。

魅力化担当教員：カリキュラムの中（総合的な学習の時間）に、奥出雲学⁽¹⁰⁾といったものを位置
づけるのか、それとも部活、部活外でやるかといったことが課題になっている。どうしても田
舎の学校は教員の代謝が激しいので、カリキュラムの中に位置づけることが必要になっている。
島前⁽¹¹⁾の場合はコーディネーターの結束が強いから、カリキュラム外でも継続的にできる。

魅力化担当教員 うち、外の部分は、〇〇コーディネーターさんや△△コーディネーターさんがやっている。どの形態を選択するかは学校デザインの問題だ。部活なら、目的集団だから部費とか部活動補助金、教員への手当もでる。

島根県立横田高校 2014年3月13日

コーディネーターの協力で教員の負担を軽減し魅力化の取り組みに継続性を持たせることができることが指摘された。このほか、授業の中に取り組むことや部活も検討されていた。

県教育庁魅力化関係者：教員の中には（※魅力化事業が）いろいろ大変だなという負担感はある

るみたいです。そういったなかでのコーディネーターというところなんだろうと思います。やっぱりどうしても授業を潰したくないというのがありますので、そういったところをコーディネーターがいろいろやってくれるということだと思います。我々が話しているのは、単なる花火、イベント事ではなくて、カリキュラムに落とし込んでいきましょう、やっぱり継続性を持たせるためにも、総合的な学習の中でしっかり持って行きましょう。それだけで足りなければ、学校設定教科科目にもかましていきましょう。

県教育庁 2014年7月8日

6-2 コーディネーター機能の類型化

① 都会—地方の橋渡し型機能

コーディネーターには「都会での経験、人脈の豊富さを活かし発信力を持つこと」、「都会の考え方を地方（地域、高校）に持ち込めること」、「よそ者の立場で地域の既存のしがらみから距離を置きからの視点を持つこと」、「地域の“ジラ”（＝駄々。不満。の意味の方言）をしがらみのないよそ者として集めること」、「地域に変革を起こすこと」、「若者、よそ者、ばか者として地域資源を見つけ地域活性化の役割を果たすこと」（各校長へのインタビュー）などの役割がみられた。

これらの都会—地方の橋渡し型の役割は、Iターン者型のコーディネーターが得意な役割である。社会的起業（social enterprise）や田舎での起業（田舎ベンチャー）を目指す都市の若者や都市の大企業出身者（教育産業、人材派遣・育成産業など）が見られた。現時点ではIターン者型のコーディネーターは、高学歴であり大企業やIT系のベンチャーでの勤務経験を持っていることが特徴である。

Iターン者型のコーディネーターは、社会人基礎力、コミュニケーション能力といった都市の労働市場で価値を持つ能力に対する関心が強い。地域の資源を教育に取り入れること、特に地域活性化を目的とした起業教育（アントレプレナーシップ教育）に強い関心を有していた。地域の可能性、課題に取り組む際には（「地域の教材化」）、普遍的能力の育成を目指すグローバル教育を志向する（Think locally, Act globally）。

彼らはよそ者の目で地域の資源を発見する能力とそれを外に向けて強力に発信する能力、各種の企画をする能力に非常に長けていた。Iターン者のよそ者としての視点、都市的（都市大企業、高学歴大学（院）生）な視点は県教委でも高い評価を得ていた。

県教育庁魅力化関係者：ああやってIターンで来てくれた人たちは、やっぱり我々にはない発想を持っていて、◇◇君（隠岐島前高校コーディネーター）なんて非常に大きい存在だったなって我々も勉強すること大きいですね。それから、津和野（※対象校の1つ）の◇○君もIターンですね。これはまあ教員の経験もあつたりするので、そういう点では、なんとか学校にうまくとけこむみたいなのもあります。いろいろほんとにいろいろな個性を出していただいています。

県教育庁 2014年7月8日

なお、都会—地方の橋渡し型機能について、前述の横田高校でも、未来や海外との橋渡しの観点に置き換えて次のように評価されていた。

魅力化担当教員：教員にないいろんな価値観や違う視点での教育のビジョンをくれる。我々教員はどうしても目の前の子どもからの視点で考える。今歩む社会からの視点をくれる。若い20代、30代のチャレンジングな人や、海外経験を持っている人もいい。新しい教育観を持っていたり地域の町おこしのビジョンを持ってる人がいい。……本音をいうと、ある程度ビッグネームの人も欲しい。自身で発信力を持っていることが望ましい。島前高校の◇◇君はその典型。

島根県立横田高校 2014年3月13日

ただし、Iターン型にも乗り越える必要のある課題があり、それは「橋」のこちら側の人間ではないことに起因する孤立の問題である。

コーディネーターは一つには、私たちの学校に新しい風を吹き込んでくれる。ただデメリットもあって教員の中にファシリテーターがいて教員の価値観・言語とのすりあわせをしていかなければいけない。それをちゃんとやらないとはじめ敵対する数年が続いてしまう。

島根県立横田高校 2014年3月13日

上記で触れられるようにIターン者では孤立が課題となっていた。地域外の人間でありかつその県の教員でもないのがIターン者である。学校では教員組織側にコーディネーターの理解者が必要となっていた（上記の魅力化担当教員はコーディネーターに対するファシリテーターと表現をしていた）。また地域から、「だめだったら逃げ出すと思われる傾向があり（前S高校校長）」、地域との信頼構築に時間がかかることが課題となっていた。

②高校—地域の橋渡し型機能

この役割では、地域のネットワークの結節点となり高校のニーズを地域に伝え、高校と地域の資源をスムーズに繋げていた（橋渡し型機能）。

コーディネーターのタイプとしては、地元でずっと育った型の人材が多く、地元の企業経営者、商工会の青年部員などが見られた。地元でずっと育った型のコーディネーターの特徴としては、地元への危機意識が強く、地域貢献意識が高い。地域の課題を地元住民としての立場で理解している。地域の諸資源との結びつきが強い。

本来は地域住民も高校に協力したい気持ちがあったがやり方が分からなかった。「近くて遠い県立高校」と呼ばれていた状況を変えることが期待されていた。

たとえば、高校が正式なルートで何かを購入・依頼するには高い費用が生じるが、地元でずっと育った型のコーディネーターは、校外の資源の利活用が得意だけでなく、利活用のコストを抑えられる。学校に畑を作りたい場合、地元の建設業者が無料でやってくれる。イベントで食材が必要な場合、口利きで安く仕入れられるなどの例が見られた。高校—地域の橋渡し型機能で行われる授業では、高校生が地域活性化をする活動は地域住民を巻き込むので、地域住民の地域活性化を促進する契機となる。（〇〇高校生が頑張っているのを一緒に頑張ろう。）このタイプが目指すグローバル教育は、高校教育の中でグローバルな視点から地域の課題を解決できる人材を作り出そうとするものであり、将来のUターンを意識していた。いわゆる“Think globally, Act locally”に対応する意識である。

③高校—行政の橋渡し型機能

このタイプは、行政（地元町村役場）と県立高校の繋がりを作る。特に、町村から高校への財政支援を促進する。このタイプには、現時点では吉川が描いたローカル・トラックによって育成されるローカル・エリート職である地方公務員としてのUターン者型があたる場合が多く見られた。大学卒業後、あるいは、都市就職を経て地元に戻って地方公務員としてコーディネーターとなるケースが見られた。地理的にも、その高校の卒業生である可能性が高くなる。地域で高校生活を過ごしており地元出身者としての信頼の形成と地元の資源へのアクセス可能性を持ち都市での経験も有していることにくわえて行政との繋がりを持っていた。下記はUターン者型のコーディネーターを採用した魅力化対象校S高校の前校長からの聞き取りである。県立のS高校は地元町村（行政）からの強力な財政的支援（年間数千万円）、人的支援を受けている。魅力化の特徴として町村との結びつきをいち早く強めたことがある。魅力化対象校の1つのS高校の前校長はS高校の状況を次のように振り返った。

S高校前校長 隠岐島前高校は全然違うけど、（魅力化コーディネーターは）僕はやっぱりUターン系の人もいいように思いますね。S高校魅力化コーディネーター〇△さんにしても、〇〇高校（他の魅力化対象校）も……かな、OBなんですよ。OBでなくても町の出身でもいいんですけど。こう言うと怒られるかも分らんけど、信用度が違うと思いますよ。今、地域おこし協力隊の人なんかでも、歩留まり率はすごく悪いんですよ、合わないとかいろんな理由で辞めていられる。〇△コーディネーターにしたって大都市で何年かずーっと働いてやっぱりふるさとへという格好で帰ってきて、もう逃げ場がないとかこの町にという思いがあるので、この人は自分を捨てていかないだろうなあというそういう信頼度は僕は高い。じゃあ隠岐島前高校のIターン型のコーディネーターは、あれだけ一生懸命やってる連中に信頼度がないかという、それはまた彼らはそれと違ったレベルで信頼をおかせるものをやっぱり持っているの。

さらにS高校前校長はU・Iターン型それぞれの利点を認識した上で、魅力化を振り返り、Uターン型のコーディネーターの利点を下記のように語った。

地域のことを理解していて、周りの人も応援しやすいですね、地域の人がね、顔知ってるので、あなただったらみたいな感じで関わってこられるというのが非常にある。ただ今のは本当に、あんまりそれを言っちゃうとじゃあもう誰もなれなくなってしまうので、たまたま〇△コーディネーターというOB、町出身の人と一緒にやってきて思うのは本当に信用が置ける、こういう人は逃げ出さない一緒にやっていける人だと。やっぱり何しても母校のため町のためという思いがまず第一に働く人なので。……理念もなくて、ここの町で町の活性化や理想の教育みたいなことをこんな人を育てたいという思いもないとそれは続かない可能性があるなと思います。

S高校前校長 2014年7月9日

6-3 コーディネーターの設置の状況と今後

魅力化対象高校は個々のケースごとにどのような橋渡し機能を設置するかに違いが生じていた。事業の力点の差異とコーディネーターのタイプの設置の違いが生じ、魅力化の目指す方向性の違いが現れ始めていた。いくつかの高校では、コーディネーターの複数化に取り組んでおり、複数のタイプのコーディネーターを組み合わせることで設置することにより、連携の効率化と魅力化事業の多層化を図っていた。県教委もコーディネーターの複数化を進めようとしている。また、各校でコーディネーター人材の確保のための研究がなされ、また県の支援のもとコーディネーター同士を結ぶ組織が作られ始めていた。

7 結語

本稿では、地域人材育成が進められていること、およびそれを推進する主要な方法である魅力化コーディネーター制度を検討した。コーディネーターには「Iターン者型」、「地元でずっと育った型」、「Uターン者型」の3つのタイプがあること、それぞれ、①都会—地方の橋渡し型機能、②高校—地域の橋渡し型機能、③高校—行政の橋渡し型機能において優れていることを見た。

島根県の離島・中山間地域の高校は進学実績の低下（あるいは進路保証の不全）と統廃合の危機に瀕している。魅力化対象校の中にも一度は一学年一学級の統廃合の寸前にまで追い込まれてきた事例がある（あるいは将来そういった事態が予測されている事例もある）。そうした中で調査対象地域では、地域型学校知の能力観・学力観がこれまでの試験学力を中心とした能力観・学力観と葛藤しながら次第に広まりつつあった。本稿では、この葛藤と広がり過程を明らかにしコーディネーター制度が果たす様子と意義を検討した。

地方の重要性を主張する議論は今日、日本中で高まり続けている。それらに多く見られる特徴は、これまで地方を都市に奉仕する存在あるいは中央主導による開発・振興の対象として見ていた視点から、地方の自立や独自性を活用するという自律分散型化の視点への移行である。高校教育の人材育成機能においても、都市部への人材輩出機能のみではなく、県立高校と町村が一体となり、地域の産業、文化から、社会、政治に至るまでの地域の活性化に対して、現時点での貢献から将来の貢献までを視野に入れた人材育成が始まろうとしている。図式的に述べるならば、教師は教科書の知識と生徒を橋渡しする。これに対してコーディネーターは、地域と生徒を橋渡しする。魅力化コーディネーターが果たす役割は大きく意義深いことが分かった。

注(1) 吉川が対象としたのはおよそ20年前の1992年度に島根県立横田高校に在籍した生徒である。

(2) 過疎化に関して吉川が対象とした島根県立横田高校のある奥出雲町も深刻な問題となっている。吉川調査のころ人口増減の均衡を取りつつあった人口動態は現在再び崩れつつある。奥出雲町では、この事態にこれまでのインフラ整備、公共事業、大企業誘致といった都市との格差是正の対策から、地域資源と若者の力を生かした地域の自律的な産業振興が議論されている（町の取り組みは、過疎地域自立促進特別措置法のもと制定された島根県奥出雲町「奥出雲町過疎地域自立促進計画（平成22年度～平成27年度）」に詳しい）。

- (3) 鳥根県は少子高齢化、過疎化がいち早く進むと同時にその対策のための地域活性化の取り組みが行われている。本発表は急速な少子高齢化、過疎化が予想される我が国の地方の高校の先進事例の研究として位置づけられる。
- (4) 「標準法」＝「公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律」。
- (5) 鳥根県立横田高校「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業 趣旨 鳥根県立横田高等学校魅力化活性化事業」より。
- (6) 6次産業、スモールビジネス、起業、脱大企業誘致依存と地域循環型経済化の推進。
- (7) 横田高校の取り組みについて詳しくは（樋田有一郎 2014）。
- (8) 魅力化対象校の1つである。
- (9) 地域と高校で最も盛んなスポーツ（部活）の1つ。
- (10) 横田高校の魅力化事業一つ。地域（奥出雲町）の資源、可能性を学ぶことを目的とする。
- (11) 隠岐島前高校のこと。

引用・参考文献

- 樋田大二郎，2014，「農山村スモールビジネスと地域人材育成—高校教育の新しい課題」青山学院大学教育学会紀要『教育研究』，58号，111-123頁。
- 樋田有一郎，2014，「町存続の生命線としての高校存続。町活性化の最前線としての高校活性化—鳥根県立横田高校の挑戦」『青少年問題』655号：42-47頁。
- 樋田・樋田，2014，「地域人材育成の教育社会学—過疎地の活性化に果たす高校教育の役割—」『青山学院大学教育人間科学部紀要』第5号，1-18頁。
- 樋田・樋田，2015，「社会関係資本と地域資源の利活用による地域人材育成—鳥根県離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業の取り組み—」，『青山学院大学教育人間科学部紀要』第6号，1-20頁。
- 荻谷剛彦，1995，『大衆教育社会のゆくえ：学歴主義と平等神話の戦後史』中央公論社。
- 荻谷剛彦他，2007「地方公立進学校におけるエリート再生の研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第47巻。
- 吉川徹，2001，『学歴社会のローカル・トラック—地方からの大学進学』世界思想社。
- 久富善之，1992「地域と教育」日本教育社会学会編『教育社会学研究』東洋館，50，66-86
- 文部科学省，2015：中央教育審議会「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」（中教審答申186号）
- 鳥根県奥出雲町「奥出雲町過疎地域自立促進計画（平成22年度～平成27年度）」
- 鳥根県教育委員会・学校企画課・県立学校改革推進室「（新）離島，中山間地域の高校魅力化・活性化事業」
- 鳥根県立横田高校「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業 趣旨 鳥根県立横田高等学校魅力化活性化事業」
- 若林敬子，1999，『学校統廃合の社会学的研究』，御茶の水書房。

ABSTRACT**Changes in Education of Senior high schools In Remote Areas
in Japan in the Age of Depopulation: How School Coordinators
Support the School Reforms in School Knowledge****Yuichiro HIDA**

This article focused on the senior high school education in remote areas in Japan. Now Japan as already modernized society is facing a population reduction problems. In remote areas communities suffer from population reduction and are trying to stop children from outflowing. In such situation schools knowledge of senior high schools in remote areas tend to focus on Community Problem Based Learning (CPBL). To support school reform school coordinators are assigned to schools. This article explain the types and roles of school coordinators in the school reforms in senior high school in remote areas in Japan.

Key words: remote areas, local revitalization, coordinator, Community Problem Based Learning (CPBL), senior high school, sociology of education